

武甲山の神について

「玄牝の門（げんぴのもん）」という老子の言葉がある。老子は、「宇宙の真理を生きよ！」と言っているのだと思うが、それでは、宇宙の真理とは何か？ それを説いたのが老子であって、「ひと言で言えば「無為自然」ということらしいが、老子の思想や哲学に関する本を読んでも、私はまだ老子の思想や哲学が判っていない。そこで、ネット検索をして、老子の思想や哲学を判りやすく説明しているホームページがないか探してみた。あった！あったのだ。伊藤公芳という人の素晴らしい「[求愚庵](#)」というホームページである。その中に「老子入門」というページがある。老子の思想については、蜂谷邦夫の訳注「老子」（2008年12月、岩波書店）という本があって、私などは、それを読んでいるのだが、なかなか難しい。伊藤公芳という人もその本を読んでいるいろいろと解説を加えてくれているのである。「老子」というのは老子の思想や哲学を書いた本のことであって、第1章から第81章までである。その第6章に「玄牝の門」のことが書かれている。[私は、その「玄牝の門」ということに関して私なりの論考を書いた。](#)しかし、今、武甲山の大神とはどのような神か、それを説明するには、もう少し論考を加えなければならないようだ。そこで、伊藤公芳という人の解説を参考にして先の論考を補充したいと思う。

ではまず、[伊藤公芳という人の解説](#)の中から、私の注目する箇所を抜き書きしてみよう。彼は次のように言っている。すなわち、

『 「谷神」は原始宗教の信仰対象。谷は地の割れ目で、古代の人はこれを女性の性器にたとえました。「玄牝」は女性のこと、「玄牝の門」は女性の生殖器をさします。』

『 老子の「玄牝の門」についての現代意識は「神は不滅で、玄牝（女性）と呼ばれる。玄牝の門は天地の根源と呼ばれ、永遠に存在し続け、これをどれだけ使っても疲れを知らず、尽きる事がない」』

『 原始時代、女性は繁殖のシンボルとして信仰の対象にされました。』・・・と。

そこで私は考える。そうなのだ。女性というものの観念、すなわち個々の女性ということではなく、繁殖のシンボルとしての女性は神であったのだ。したがって、そういう観念のもと、原始時代の人びとは、神に祈るということは繁殖を祈ることに他ならなかった。原始時代の人びとの感覚としては、神は繁殖を司るものであったのである。祈る対象はいろいろあったと思うが、それが石棒であっても柱であっても、またそれが霊山であっても、

祈りとしては、繁殖を祈ったのである。神との繋がり、それが繁殖をもたらす。これは宇宙の真理である、というのが老子の「無為自然」の哲学でもあると私は考えている。

竜神とか「繁殖の神」とか諏訪の神とかマダラ神とか、いろいろな名で呼ぶけれど、それらは根源的には「玄牝の門（げんぴのもん）」であり、宇宙の真理を現わす神である。だから、私は、「表面的なものにとらわれずにその根にある根源的なものに意識を向けよ！」と言いたい。「玄牝の門（げんぴのもん）」はそれらの神の「後戸の神」なのである。

神の概念のなかった縄文時代、あったのは祈り。神の観念はあった。それが「古層の神」であるが、その神に繁殖を祈った。だから、「古層の神」とは「繁殖の神」という言い方がいちばん判りやすい。すべてのものがこの神の力によって生まれるのである。

なお、この「繁殖の神」、私は「ホト神様」と呼んでいるのだが、これについては電子書籍「女性礼賛」の第5章に次のように書いた。すなわち、

『 天の神と地の神をつなぐ機能を持つものとしては、諏訪大社の御柱（おんぼしら）や伊勢神宮の心御柱のほか、聖地に存在する磐座（いわくら）やモンゴルのオボー、そして道祖神などがあるが、私は、それらの源流にあるのは石棒だと考えている。そして、群馬県月夜野町は利根川河畔の矢瀬遺跡に訪れてその実感を強めたのだが、その報告はあとの[補筆1](#)で行う。』・・・と。その補筆を見てもらいたいが、女性性器や男性性器はあからさまに表現すべきではないのである。美的感覚にもとづいて格調高く表現すべきである。女性性器はもちろん女性のシンボルであるが、これを写實的に表現すればいやらしい。グロテスクというかエロチックなのである。エロチックは「エロ」であってプラトンの言う「エロス」とはほど遠い。プラトンの言う「エロス」は「美」の追求である。武甲山の神は、老子の言う「玄牝の門」であり、プラトンの言う「エロス」「美」の神である。

すなわち、武甲山の神は、宇宙の真理を象徴する神であり、すべてのものを生み出す大神なのである。それが私のこの度、思考を重ねて辿り着いた今の考えである。

私たちは、武甲山の神に、新しい命の誕生と地域の豊穡を祈るのである。